霊～幽霊屋敷～

カズン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊～幽霊屋敷～

【Ｎコード】
Ｎ０００２Ｇ

【作者名】
カズン

【あらすじ】
幽霊が大嫌いの主人公、中野大空（なかのそら）は幼馴染に無理やり肝試しに参加させられる。肝試しの途中で見つけた屋敷に入っていくそらたち。しかしそこでは予想もしなかったできなかった出来事に巻き込まれていく。

第壱章　≪はじまり≫

何でこうなってしまったのだろう。僕はいまだにこの状況を理解できていないのだ。

一週間前の貧しいけど平和で楽しい日々が嘘のようだった。姉弟だけの生活は決して楽ではなかったけどとても楽しかった。

でもその生活は崩れてしまった。あの時、僕が彼女を止められていたら、こうはならなかったのかも知れない。

「葵姉、今助けるからね。絶対に・・・」

僕はそうつぶやき目の前にそびえたつ屋敷に入って行く。

この中に何があるのかわからない。ただひとつだけわかることがある。決していいものはない。あるのは恐怖だけだろう。

でも僕は行かなきゃいけない。あの生活を取り戻すために。あの明るくてとても楽しい生活を・・・・とり戻すために。

第壱章　≪はじまり≫

霊

「え！？今なんて言った！？」

僕は彼らが何を言っているのか理解できなかった。というより理解したくなかっただけだったりする・・・・。

「だーかーらー！！肝試しをしようって言ってるの！！」

バン！！と僕の机を思いっきり叩きながら叫んでいるこの少女・・・。僕の幼馴染である三浦（みうら）　美琴（みこと）。

こいつの考えることが良かったためしがない。でもよりにもよって肝試しとは・・・。確かに今は夏で時期はぴったりだが・・・。

「やめてやれよ。そらは幽霊が怖いんだよ。お前もよく知ってるだろ？」

そう言って僕たちに近づいてきたのは同じく美琴と同じく幼馴染の新野（しんの）　拓斗（たくと）。そう、拓斗が言う通り、僕は幽霊が大、大、大嫌いなのだ。そのことは美琴も知っているはずだ。つまりこれは僕に対する嫌がらせなのだ。

「知ってるよ。だからこそ、そらを連れていくの！」

「ぜーったいに行かないからな！！！！！」

と叫んでは見たものの・・・・。

「この森が有名な心霊スポット！！！！！」

結局、断りきれず連れてこられてしまった。自分の弱さに涙が出る。

僕はよーく目の前の森を見る。確かにこの森なら幽霊の一匹や二匹ぐらい出てきてもおかしくない。ん？幽霊って匹で数えていいものなのだろうか？

「んじゃ行きますか！！」

拓斗は僕の襟首をつかむと引きずりながら前へと進む。なんでこうなってしまったのだろう。僕がもうちょっと強い人間だったらよかったのに・・・・。僕は自分で自分の弱さを呪った。

あ、そいや僕の自己紹介がまだだった！僕の名前は中野（なかの）　大空（そら）。大空のように大きくて寛大な心を持てるようにって意味でつけたらしいけど、僕はとてもそんな人間にはなれないけど。

「ん？あれ、何かな？」

森をしばらく進んでいると美琴が前の方を指差した。まさか幽霊！？と思ったけどどうやら違うようだ。美琴の指の先には大きな屋敷がそびえ立っていた。何十年も前に作られたような和風の屋敷だ。

いかにもホラー映画に出てきそうな屋敷だ。

――まさかとは思うけどこの屋敷に入るんじゃぁ・・・。

「よし！！入るか！！！」

――やっぱり・・・。

僕は心の中でそうつぶやいた。もうここまで来たらやけだ。最後までこいつらに付き合うしかない。そう言っても怖いのには変わりないのだが・・・・。

僕は自分から屋敷に近づいていき、屋敷の扉を開けて中に入った。二人は僕の行動に驚いていた。僕自身が一番驚いていたのだけど・・・。

「ほら！早く行くよ！！！」

「お、おぅ・・・・」

こうして僕らはこの屋敷に足を踏み入れた。しかしこれが一番の過ちだとは今の僕たちにはわからなかった。そう、これが悪夢の始まりだったのだ。決して忘れることのできない悪夢の・・・。

第壱章　≪はじまり≫（後書き）

始めまして！見ての通り駄文ですがどうか温かい目で見守ってください。
後、肝試しなのに全員で移動しているのは気にしたら負けｗｗｗ

第弐章　≪少年と少女　前編≫

ここはどこなんだろう。やけに真っ暗な場所だ。お兄ちゃんについてきたはいいけどはぐれてしまった・・・。こんなことだったらお兄ちゃんの言うとおり家で待ってればよかった。

「碧兄ちゃん・・・、葵姉ちゃん・・・どこぉ・・・？」

怖い・・・。ここにはたくさんいる。ここに居てはいけないことはなんとなくわかる。
でも、どうしたらいいかわからない。

お兄ちゃん・・・助けて・・・。

僕たちは屋敷に足を踏み入れた。懐中電灯で照らされた屋敷の中はかなり不気味なもので今にも何かが出てきそうな感じだ。はっきり言って今すぐここから抜け出したい気分だ。

「なんかほんとに幽霊屋敷みたいだね☆」

「だね☆って・・・」

美琴は満面の笑顔を向けてそう言った。こいつは昔からそうだった。突っ込まなくていいことに首を突っ込み、僕はそのとばっちりをうける。

この性格だけは何年経っても変わらないらしい。

「で、これからどうすんだよ。この屋敷、だいぶ広いみたいだから全部見て回るってわけにもいかねーだろ？」

「そうよねぇ・・・・。じゃあもうちょっと奥まで進んで、それで何もなかったら引き返そうか」

「何かがあったら困るって！！」

「んじゃ行くか。」

「そうだね」

――無視かい！！！！

まるで僕の声がまったく聞こえていないかのように二人は僕のことを無視して先に進み奥の部屋に入っていった。

「ちょっと！！おいてくなよ！！」

僕はそう叫んで二人の入った部屋に駆け込んだ。しかしそこには二人の姿はなかった。

「あ…れ…？」

僕はもう一度部屋を見渡す。しかし誰も見当たらない。

――こここここ、これってまさか神隠しってやつか！？

予想外の出来事だ。こんなとこで一人取り残されるなんて・・・。これほど恐ろしいことはなかった。

「お、おい。おふざけならやめろよ。」

僕の震えた声が部屋に浸透する。しかし誰も出てこない。

「お兄ちゃんはどうしてこんなところへ？」

ものすごく小さくて不気味な声が後ろから聞こえてきた。この声は美琴のものでも拓斗のものでもない。

ということは・・・・。

僕はゆっくりと後ろを振り返る。そこには着物を着た小学生くらいの背格好の少年が立っていた。

「ん？お兄ちゃん、どしたの？顔色が悪いよ？」
「い、いや・・・別に・・・」

どしたのって・・・。こんな不気味な場所で着物を着た少年が立っていたら顔色も悪くなるってもので・・・。ていうかこれってやっぱり・・・。

「あのー、一つだけ聞かせてもらってもいい？」
「何？」
「君って、幽霊？」

自分で言っておいてなんて間抜けな質問なんだろうと思った。もし幽霊だとしても自分から「はい、幽霊です」なんて言う幽霊はどこにもいない。

「うん♪」

ここにいた。自分から幽霊と名乗る幽霊がここにいた・・・。なんてバカな幽霊だ・・・。

――って、そんなこと考えてる場合かー！！
と自分の中で突っ込みを入れる。そう、それどころじゃない。本当に幽霊なんていたんだ・・・・。

――そういうことでもなく！！
もうよくわからない・・・・。この場合どうすればいいのだ？

「まぁ、幽霊って言っても完全な幽霊じゃないけどねー」

「へ？」

「ほら、僕には足もあるし、お兄ちゃんにも触れられる」

確かに、この子にはちゃんと足があるし今、僕の服の袖をつかんでいる。だが、いまいちわからない。幽霊に完全も不完全もあるのだろうか・・・。

――うーん。幽霊の世界って僕らの考えているよりずーっと奥深いんだなぁ・・・。

僕はひとり、心の中で感心していた。

「まぁ、そのことは置いといて・・・。お兄ちゃんはここで何してるの？」

「うーん。肝試し？」

もはや肝試しになっていないような気がする。

「肝試し？ってことはさっきの人たちはお兄ちゃんの友達か。」

そうだった。今はいなくなった二人を探してたんだった。あまりにもフレンドリーな幽霊なせいで頭の中から消えていた。ごめんね二人とも。

「その二人ってどこ行ったかわかる？」

少年は僕の質問には答えず指で床を指した。僕は少年の指の先に視線を移す。今まで気づかなかったそこには大きな穴があった。二人はこの穴に落ちたらしい。

「この穴は深いねぇ・・・。たぶんこの屋敷の地下まで続いてると思うよ」

少年はそう言いながら穴の中を覗き込む。確かにかなり深そうだ。こんな穴に落ちて二人は大丈夫なのだろうか。まぁ、拓斗はともかく、美琴は大丈夫だろう。丈夫だけが取り柄のようなやつだから（笑）

まぁ、本人に言ったら間違いなく半殺しにあうだろうから言えないけど・・・。

「で、どうする？助けに行く？」

「まぁ、行かないと半殺しにあっちゃうから」

冗談抜きで殺られるだろう。おもに美琴に・・・。

「なら行くしかないね。んじゃついてきて。僕も地下に用事があるから。」

こうして僕はフレンドリーな幽霊についていくことになった。でも一つだけ不安なことが・・・。

「ねぇねぇ、これ、一応ホラー小説なんだけど・・・。ホラー目当ての読者さんたちが怒っちゃわないかな？」

「しかたないでしょ。作者がホラーは苦手のチキン野郎なんだから」

「なら書かなきゃいいのに・・・」

「チキン野郎のくせにホラーゲームやるやつだからね・・・」

「この先不安だ・・・」

「大丈夫！次ぐらいから怖いよ！・・・たぶん」

不安なことばかりだけどこの先大丈夫かぁ？

第弐章　≪少年と少女　前編≫（後書き）

はいw怖いの苦手なのにホラーゲームばっかりやってるチキン野郎ですwバイオハザードとか零とかやりまくってますwww好きなゲームは零～紅い蝶～ですw

さて、今回は全くもってホラー要素がないですねwこれからちょくちょくこういう場面があると思いますんで覚悟しててくださいなw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0002g/

霊～幽霊屋敷～

2010年11月24日01時30分発行